

「環境」と「人」を未来へつなぐ

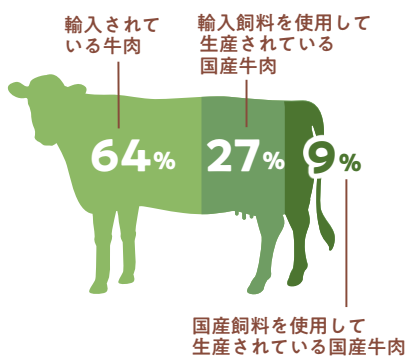
「産直」はなゆき農場有機牛

北海道で大切に育てられた肉牛が、3月にコープデリ宅配に登場します。その名も「産直 はなゆき農場有機牛」。「環境」と「人」の両面で、未来のことを考えた取り組みです。



2つの課題に直面する日本の畜産業

私たちの食卓に並ぶお肉。「国産」のものも多いですが、実はその餌も含めると国産はわずかで、牛肉の場合9%。効率やコストを追求した結果、餌の大半を輸入に頼っている



出典：農林水産省令和2年度食料需給表

ます。ところがコロナ禍や円安、ウクライナ情勢の悪化などで、餌代など肉牛を育てるための費用が急激に高騰しています。また畜産を含めた国内の生産者は高齢化し、後継者が不足しています。日本の畜産業は今、「低い自給率」と「担い手不足」という2つの課題に直面しているのです。

持続可能な畜産業を目指す生産者との取り組み

コープデリは「未来へつなぐ」のもとSDGsの取り組みを進めており、生産者とともに持続可能な生

産のあり方を考えてきました。その生産者の一人が、北十勝ファーム有限会社代表取締役 上田金穂さん。上田さんは15年ほど前から、餌はできるだけ地元北海道のものを使用、自家生産もしています。牛に牧草を食べさせ、その糞を堆肥化して牧草を育てる、循環型の畜産も行っています。また、なるべく牛にストレスを与えず自然のまま飼育するため、夏は広々とした農場に放牧。放牧中も一頭ずつ健康状態をチェックしており、スタッフが丁寧に牛に向き合っています。



「放牧での肥育に適した『日本短角種』という牛を飼育しています。和牛の一つで、赤身の味わいおいしい品種です」と話す上田さん

組む生産者を、「産直」としてコープデリ・組合員が応援するための取り組みです。

今回の取り組みは、目標12：

つくる責任 つかう責任
につながっています。



環境に配慮し 自給力向上につなげる

日本で「有機」「オーガニック」として流通させるためには、厳しい認証基準をクリアしなければなりません。牛を育てる前から、農場の牧草には農薬を使用しないこと。有機栽培された餌を与え、ストレスなく牛を育てること。さまざまな管理をすべて記録し、有機JAS認証を受け肉牛として出荷するためには数年かかります。

その間、生産者には収入がないため、コープデリが子牛を購入して北十勝ファームに預けることで、負担を軽くしました。2018年から有機牛の取り組みをスタート、準備段階から一緒に取り組みを進めてきました。



有機牛の餌の一つ、有機しょうゆのしぼりかす。宅配で取り扱っている有機しょうゆのメーカーをコープデリが紹介し、餌として確保できた

新しい 生産者支援のかたち

コープデリでは、有機牛の取り組みを「若手生産者の支援」としても位置付けています。国内の生産者が高齢化する中、これからの担い手を応援することはとても大切です。

有機牛を生産するため、北十勝ファームの一部門として「株式会社はなゆき農場」を任せられたのが、中村梢乃さん。埼玉県出身で、大学

まで犬や猫に触れたこともほとんどなかったそう。進学を機に動物に関わるようになり、北十勝ファームに就職して14年目。スタッフの中心となる一人です。

上田さんは、中村さんの成長のために、日々の管理だけでなく経営面も任せています。「こうしたことができるのも、コープデリと一緒に取り組みを進めてくれたからこそ」と上田さんは話します。生産者支援のかたちとしても、新たなチャレンジです。



農場で餌を与えながら、牛の健康状態をチェックする中村さん

2023年3月、 ついに発売へ

こうして数年をかけて準備し、「環境」と「人」の両面で未来のことを考えた「産直はなゆき農場有機牛」が、ついに発売されます。取り扱いが宅配の商品カタログ『Vie Nature』で数量限定での販売となりますが、組合員の皆さんが食べることで、生産者への応援につながります。

コープデリはこれからも、食の未来を考え、生産者への支援を続けます。



※画像はイメージです



Webでも「産直はなゆき農場
有機牛」をご紹介! ※2月20日公開予定



コープデリグループ
サステナビリティサイト



商品に携わる
人と想いを伝える
「ヒトとコトと」

未来へ
つなごう

コープデリグループは、事業と活動を通して「SDGs (持続可能な開発目標)」の達成を目指しています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

